

# 女媧の変遷について

—文献と画像石資料にもとづいて—

重 信 あゆみ

## はじめに

拙稿は、文献や画像石資料の分析に基づき、中国古代の女神として知られる女媧について考察したものである。

女媧と伏羲について書かれた論文は多いが、女媧のみについて体系的に整理し、考察された論文は、管見の限り楊利慧氏の「女媧的神話与信仰」のみである<sup>1)</sup>。女媧は当初、必ずしも伏羲とは組み合わされていないが、その時期の女媧こそが重要である。女媧は、三皇の一人として位置付けられていた時期もある。また、馬王堆帛書においては、天帝のように位置付けられている。また、明代に書かれたとされる『封神演義』<sup>2)</sup>において、女媧は、伏羲、神農、軒轅（三聖であり、天帝）の下に位置付けられ、仙界と人間界とを行き来する者として表わされている。

その姿は、紂王の言葉を借ると、「其顔、豔麗、絶世無双」である。その姿は、西王母の姿と重なり、また、その役割も西王母が担わされた役割と類似している<sup>3)</sup>。女媧は本来、下半身が蛇であり、この事に関して、蛇の特性と、当時の宗教観念とあわせて考察したい。伏羲は画像石の中で蛇の形状をとるが、これは女媧の姿が投影されたものではないだろうか。

女媧は、馬王堆帛書の出土した南方地域においては天帝であり、また、伏羲とペアとされてから後も天帝という認識が継続していることが考古学資料から知ることが出来る。おそらく、女媧と伏羲は、本来、別々の地域

の神であったであろう。

## 1. 女媧補天

文献の内容から「女媧」は、「補天を行う女媧」、「人類を創生する女媧」、「その他」の3つに分類することができる。まずは、「補天を行う女媧」について検討する。

「補天を行う女媧」の記載がある文献は、『淮南子』覽冥訓（前漢）、『論衡』談天（後漢）、『列子』湯問篇<sup>4)</sup>、『史記』三皇本紀（唐）<sup>5)</sup>、である。

往古の時、四極廢れ、九州裂け、天は、兼ねて覆わず、地は、周ねく載せず、火は、熾炎として滅せず、水は、浩洋として息まず。猛獸は、顛民を食らい、鷲鳥は、老弱を攫む。是において女媧、五色の石を鍊り、以て蒼天を補う。鼈足を断ちて以て四極に立て、黒龍を殺して以て冀州を済う。蘆灰を積みて以て淫水を止む。蒼天補われ、四極正しく、淫水涸れ、冀州平らぐ。狡虫死し、顛民、生まれて、方州を背にし、圓天を抱く。春を和し、夏を陽し、秋を殺し、冬を約す。方を枕とし、繩に寝ぬ<sup>6)</sup>。陰陽の壅沈し、通ぜざる所の者は、之に竅理す。氣を逆にし物を戻らせ、民の積むを傷なう者は、之を絶止す<sup>7)</sup>（『淮南子』覽冥訓・前漢）

上記の記載は、「当此之時」と更に続いている<sup>8)</sup>。おそらく、「往古之時～絶止之」の部分は、ひとまとまりの記述であり、女媧についての前漢時代以前からの伝承であろう。また、女媧は、「鍊五色之石～補蒼天」と五色の石で蒼天を補修しただけでなく、「背方州、抱圓天」と、この世界を実際に支え、「陰陽～竅理之」と、この世界を秩序付け、「和春陽夏、殺秋約冬」と、四季をも司る女神であることが分かる。つまり、女媧は世界を司る最高神であったようである。また、以下のように続く。

其の功烈を考うるに、上は、九天に際し、下は、黄壚に契す。名声は、後世に被り、光暉は、万物に重なる。雷車に乗り、応龍を服駕し、青虬を驂し、絶瑞を援し、蘿図を席く。黄雲は、絡わり、白螭を前にし、奔蛇を後にす。浮游消揺し、鬼神に導かれ、九天に登る。帝に靈門に朝し、宓穆して太祖の下に休む<sup>9)</sup>。(『淮南子』覽冥訓)

上記の記載は、女媧の伝承に対する前漢時代の記述であろう<sup>10)</sup>。「朝帝靈門」とあるように、女媧が天帝のもとを訪れるのであるから、最高神ではない。また、「太祖」とは、高誘注によれば、「道の大元」であるが、これでは、「女媧が太祖の下で休む」という文を理解し難い。「太祖」とは、その氏族の始祖のことであり、ここも「女媧は、始祖の下で休んだ」と理解すべきであろう。

ここでは女媧が人面蛇身であるという記載は無いが、龍には関係があるようである。「乗雷車～太祖之下」は、馬王堆帛書の昇仙図をイメージさせる。そこでは、女媧が天帝の位置に描かれ、そのもとに死者が龍舟に乗って昇仙していくと理解されている<sup>11)</sup>。

しかし、上記の記載から一つの疑問が生じる。つまり、前漢に描かれた馬王堆帛書に天帝の位置に位置づけられている神が女媧であるとすれば、同時代の『淮南子』覽冥訓に記述されている「帝」とは、一体なにものであろうか。また、馬王堆帛書が描かれた地域と『淮南子』がまとめられた地域は同じ楚の文化圏に属していると考えられるが、なぜ、このような違いが生ずるのであろう。

まず、『淮南子』覽冥訓における「帝」とは、一体なにものであるのか。

『淮南子』において、「帝」として表されている神は、表1の通りである。

表1における神々の中で女媧とかかわりのある神は、黄帝と伏羲である。まず、女媧と黄帝の関係は、『淮南子』説林訓から窺うことができる。

表1

帝	内 容	篇名	備考
共工	顓頊や高辛と争い，帝と為ろうとするが，敗れ，不周山を崩す	原道訓	
黄帝		俶真訓， 天文訓， 時則訓， 覽冥訓， 繆称訓， 兵略訓， 説林訓， 人間訓， 修務訓， 泰族訓	
太皞	伏羲のこと。「其佐句芒，執規而治春。其神為歲星，其獸蒼龍，其音角，其日甲乙。」	天文訓	
顓頊		天文訓，齊俗訓	
少昊		天文訓	
炎帝		天文訓，兵略訓など	

黄帝，陰陽を生じ，上駢，耳目を生じ，桑林，臂手を生ず。此れ女媧の七十化する所以なり<sup>12)</sup>。（『淮南子』説林訓）

「女媧の七十化」は女媧自身が七十化したと読む方が素直なように思われるが，高誘は，次のように註している。

上駢桑林，皆神名なり<sup>13)</sup>。

女媧，天下に王たる者なり。七十変し，造化す。此れ造化，治世は，一人の功に非ざるを言うなり<sup>14)</sup>。

つまり、上駢・桑林という神々が人の耳目や臂手を作り、女媧はそれらの神々とともに人を七十化させて造り上げたと考えているようだ。

しかし、「女媧の七十化」は、神々の取りまとめ役として他の神々よりも上位に位置する女媧と、人のパーツをまとめる役割を担わされ、他の神々と同列に位置している女媧の二つ解釈が可能であろう。これらのことを考える上で、次の記述を見ていくことにする。

然れども猶お未だ處戲氏の道に及ばざるなり<sup>15)</sup>。

伏羲、女媧法度を設けず而も至徳を以て後世に遺す<sup>16)</sup>（『淮南子』覽冥訓）

として描かれている。『淮南子』覽冥訓によれば、「黄帝の世の中の治め方は、處戲（伏羲）には及ばない。」ということである<sup>17)</sup>。つまり、伏羲は、黄帝よりも上位に位置している。また、「伏羲、女媧」と並列して書かれているということは、伏羲と女媧は、同ランクの神として認識されていたことが分かる。これらのことから、女媧は、黄帝よりも上位に位置づけられていたのであろう。つまり、女媧は、他の神々よりも上位に位置し、それぞれの神々が作った人間の各パーツをまとめ、最終的に人間を作りあげたと解釈できるのではないだろうか。

それでは、『淮南子』覽冥訓に表されている「帝」とは、一体誰か。それは、女媧と関係があり、上位に位置する「帝」である。女媧よりも上位に位置する神は、管見の限りでは無い。しかし、恐らく、女媧と同位、もしくは、後の時代には、女媧よりも上位として認識されていた伏羲という可能性を考えることができるのではないだろうか。

それでは、馬王堆帛書において天帝の地位に君臨している神は一体誰か。

馬王堆帛書において、天帝として君臨している神は、女媧であるという説、伏羲であるという説、燭龍である説など様々である。曾布川氏は、

『崑崙山への昇仙—古代中国人が描いた死後の世界—』の中で、この神を女媧としている。この神が人身蛇尾であること、女性の特徴を備えていること、そして、天帝の位置に配されているということが根拠である。

おそらく、この神は、女媧であろう。それでは、『淮南子』覽冥訓と馬王堆帛書の矛盾をどのように考えればよいのか。おそらく、女媧は、前漢以前では、天帝であったのであろう。また、女媧を天帝として位置付けている世界は、古代人が描いていた死後の世界であったと考えられる。しかし、前漢以降、伏羲が天帝として登場し、女媧と同等に扱われるようになる。そして、死後の世界においては、伏羲と女媧が天帝に位置づけられ、その反映として、後漢時代に多く造営された画像石墓において、伏羲と女媧がとも天帝的な役割を持つものとして描かれることが多い。つまり、女媧は、伏羲とペアとされた後も女媧が天帝の性格を持つ神として描かれる戦国時代からの構図そのものは、連綿として継承されたのであろう。このことは特に四川省の画像石に顕著に表されている。画像における女媧の配置については、後に考察していくことにする。

『淮南子』覽冥訓での女媧に対して高誘（後漢）は、「女媧は、陰帝にして、虚戲を佐けて治むる者なり。」<sup>18)</sup>と註している。『淮南子』覽冥訓においては、女媧と伏羲はペアとしては登場しない。また後の文献では一緒に表される共工・顓頊の神話とは別ものとして表されている。

高誘註において、女媧は「陰帝」と表されている。陰帝という語は高誘註にはじめてみえる語であり、彼の発明による造語かもしれない。「帝」とは本来、天帝をあらわし、のちに皇帝をもあらわした語である。さきにもたように高誘は女媧を「天下に王たる者なり」とそこに地上の皇帝のイメージを持たせている。天が陽だとすれば、地は陰であろう。陰と陽とは相互に補完しあう形であるから、「陽」である伏羲と「陰」である女媧は、二人で天地を治めていたと考えられる。ただし、「陰帝」という言葉からは、たんに地上の帝王だけでなく、地下世界あるいは死者の世界の帝王と

いうイメージも強く受ける。馬王堆では死者の昇仙と関連し、天帝であった女媧が、その役割を伏羲と共有することによって、天界は伏羲に譲り、天界から地上へと降り立ったように思われる。

儒書に言う、「共工、顓頊と争い、天子為らんとするも、勝たず。怒りて、不周の山に觸れ、天柱をして折らしめ、地維絶たしむ。女媧、五色石を銷煉し、以て蒼天を補う。鼈足を斷ちて以て四極に立て、天、西北に足らず、故に日月移る。地東南に不足し、故に百川に注ぐ」<sup>19)</sup>  
（『論衡』談天・後漢）

『論衡』において、女媧は、「女媧、人也」「女媧多(以)前、齒人為る者は、人皇最も先なり」(女媧多(以)前、齒為人者、人皇最先)と考えられていたようである。王充が「人」だと考えていたということは、一般的には、神として考えられていたということであろう。『論衡』については後ほど考察する。

然らば則ち天地も亦、物なり。物足らざる有り、故に昔、女媧氏、五色の石を練りて以て其の闕を補う。鼈の足を斷ち、以て四極に立つ。其の後、共工氏、顓頊と争いて帝と為る、怒りて不周の山に觸れ、天柱を折り、地維を絶つ。故に天、西北に傾き、日月辰星、就る。地、東南に満ちず、故に百川水潦歸す<sup>20)</sup>。（『列子』湯問篇・魏晉以前）

『列子』湯問篇において、女媧は、張湛（晋）が註において「女媧は、神人なり。故に能く五常の精を練りて以て陰陽を調和し、晷度をして順序し、必ずしも器質を以て相い補わざらしむるなり。（女媧、神人、故能練五常之精以調和陰陽、使晷度順序、不必以器質相補也。）」と書いている。

「晷度」とは、日時計のことであり、「不必以器質相補也」とは、機械で微調整するとようなことはないということである。つまり、女媧は、太陽および時間を支配する神であると認識されていたことを窺い知ることができる。また、上記に挙げた高誘註のように女媧は、「陰」のみを支配し、「陽」を支配する帝の存在を示しているのに対して、張湛は、女媧が陰陽を支配し、単独の天帝として認識していたようである。上記の記述は、馬王堆帛書に描かれている天帝である女媧と一致する。なお唐、陸徳明『經典積文』においては、「媧音瓜，女媧氏，古天子，風姓。」と記され、天子としている。

乃ち祝融と戦いて勝たずして怒る。乃ち頭は、不周山に觸れ、崩る。天柱、折れ、地維缺く。女媧は、乃ち五色石を鍊り、以て天を補う。鼈足を以て四極に立て、蘆灰を聚めて滔水を止め、以て冀州を濟しくす。是において地は、平らぎ、天は、成る。舊物を改めず。女媧氏没し、神農氏作る<sup>21)</sup>。(『史記』三皇本紀・唐)

『史記』三皇本紀において女媧は、次のように説明されている。

女媧氏も亦、風姓なり。蛇身人首。神聖の徳有りて宓犧に代わりて立つ。號して女希氏と曰う。革造無く、惟だ笙の簧を作るのみ。故に易に載せず。五運を承けず。一に曰く、女媧も亦、木徳王なり。蓋し、宓犧の後、已に數世を経。金木輪環し、周りて復始む。特り女媧を擧げ、其の功、高きを以て、三皇に充つ<sup>22)</sup>。

『史記』三皇本紀は、唐の文献であり、また、『經典積文』もまた同時代の文献である。これらの文献に共通している女媧に対する認識としては、天子であるということであり、また、女媧と伏羲は、同じ「風姓」であり、



同族であるとしている。

以上、「補天における女媧」に関する文献を時代順に考察した。これらに共通している点は、女媧が五色の石を練り、補天をしたという内容である。しかし、註においては女媧に対する認識に漢代以降に変化がある。前漢においても女媧と伏羲がペアであるという認識の兆しが見えるが、特に後漢以降、女媧と伏羲とはペアとしてのイメージが固定される。このことは、後に述べる画像石において特に顕著である。これは女媧が単独の神としての地位を失ったということを表しているのであろう。

それでは、なぜ、伏羲とペアとして表されるようになったのか。伏羲については、聞一多氏の『伏羲考』<sup>23)</sup> に詳しく記載されているので、そちらを参考にされたいが、聞一多氏は、その中で、「伏羲は、龍をトーテムに持つ部族の始祖である」<sup>24)</sup> と述べている。また、「伏羲と禹は、同一姓であり、禹は、伏羲の後を享けたものである。」<sup>25)</sup> また、「伏羲の氏族は、夏后氏と近いものである」<sup>26)</sup> などと述べ、伏羲氏族と漢族との密接な関わりを指摘している。伏羲は、『易』繫辞伝に「八卦を作ったものであり、漁をするための網を作ったもの」として表されている<sup>27)</sup>。『易』の成立時期や地域については明らかではないが、『易』を為した者としては、伏羲、周の文王、孔子の名が伝説として残っている。つまり、『易』は、南方ではなく中原地域と関わりが深い。また、『易』繫辞伝よりも古いであろうと考えられる『莊子』にも記載がある<sup>28)</sup>。莊子は、河南省の人であり、これらのことから、伏羲も中原地域にかかわりがあったと推測できないだろうか。聞一多氏は、女媧と伏羲は同一姓であり、苗族とのかかわりについても指摘されている<sup>29)</sup>。つまり、彼は、女媧と伏羲とは、本来、同族であったと考えているようである。しかし、女媧は楚文化圏に属する神であり、伏羲は中原文化圏に属する神であったと推測することはできないだろうか。また、赤塚忠氏は、伏羲が職能集団の神であったことを指摘している<sup>30)</sup>。

国が滅ぼされるなどして異なる文化が混合する際、どちらかの文化が消滅吸収されてしまうのではなく、むしろ融合し、新たな文化が誕生したのではないだろうか。そのとき、それぞれの氏族の神は、夫婦（後には兄妹）という形で表されるようになったのであろう。女媧が伏羲と関係があるとされる記載で、最も古い文献は、『淮南子』覽冥訓の記載であるが、それ以前の文献には、女媧と伏羲は、別個に表されている。『淮南子』は、前漢時代に編集された文献であるが、この時代は春秋・戦国のそれぞれ独立していた地方文化が、秦の始皇帝の天下統一によって混合し、その後、漢帝国の支配により人々の交流が進み、一定の熟成期間を経て、自然な形で中原文化と楚文化とが融合していったのではないだろうか。また戦国時代に生まれた陰陽五行思想が、中国の学術や文化のほとんどすべての分野に浸透していった時代でもあり、様々なものが陰陽五行という型に嵌め込まれていった。そのような機運の中で女媧と伏羲も似たような立場のものを組み合わせるといった形でペアとされたのではないだろうか。

## 2. 人類の創生者

人類の創生者である女媧は、1. 女媧が単独で人類を創生する、2. 伏羲とともに人類の創生者となるという二つに分類される。まず、単独で人類を創生する女媧は、『太平御覧』巻78引用されている『風俗通義』に記載がある。

天地、開闢し、未だ人民有らず。女媧、黄土を搏めて人を作り、務め劇しく、力を供する暇あらず。乃ち泥中より繩を引きて、舉げて以て人と為す。故に富貴なる者は黄土人なり。貧賤なる者は、繩人なり<sup>31)</sup>。  
(『風俗通義』・後漢)

上記の記述からは女媧と蛇との直接的な関連は見出せないが、蛇と繩

のイメージはつながりがある。

また、上記のように縄で人類を創造したという伝承と類似のものは、インドにも存在している。

多くの神々と阿修羅が大蛇で縄を作り、その縄を山に巻いて回し、その回っている山の中から万物が誕生した<sup>32)</sup>。

また、女媧が万物を創造した証拠として『楚辞』天問を挙げる事ができるであろう。

登立して帝と為す。孰れか之を道尚す<sup>33)</sup>

女媧、體有り。孰れか之を制匠れるや<sup>34)</sup> (『楚辞』天問・戦国)

上記の「登立して帝と為す。孰れか之を道尚す」という部分は、王逸は、伏羲の事を表したものであるとし、また、曾布川氏は、女媧のことであるとされている<sup>35)</sup>。つまり、曾布川氏の説に依ると、登立して帝(天帝)となったのは、女媧であり、「天問」には伏羲のことは、記載されていないということになる。このことは、戦国時代において女媧は、単独の神であった証拠となる。また、『楚辞』天問の記述が女媧のみを描いたものだとすれば、戦国時代には、伏羲と女媧の接点はなかったということになる。また、「女媧、體有り。孰れか之を制匠れるや」という部分からは、次の二点を推測することが可能であろう。まずは、『楚辞』天問が成立した頃、女媧には、体があったということである。しかし、どのような形をしていたのかということとは書かれていない。仮に、馬王堆帛書に描かれている神が女媧だとすると、同じ楚の文化圏において成立した『楚辞』天問に描かれている女媧も下半身が蛇である神として知られていたということは推測可能である。また、王逸註では、「傳えて言うに、女媧、人頭蛇身、一日

七十化し、其の體此の如く、誰れか制匠して之を圖く所ならんや」<sup>36)</sup>とある。王逸は、後漢時代の人であるので、『楚辞』天問の成立時期を戦国時代であったとすると、3～400年ほど隔たりがあるが、この王逸註が女媧が人頭蛇身の体を持つ神として記載されている文献の中で最も古い記載である。また、『楚辞』天問は、孫重恩氏によると、「廟に描かれている伏羲と女媧の像を見て書かれたもの」<sup>37)</sup>とされ、『楚辞』は、前漢の馬王堆帛書と時代的に近く、同じ楚文化圏に属していることから考えて、人頭蛇身の女媧が描かれていたと考えられる。二つ目として、女媧は、「孰制匠之」という部分から万物の身体を創造したということを推測することができるであろう。つまり、万物の身体を作り出した女媧の身体自体は、一体、誰が創造したのだろうかという疑問が背景にあることが想像できる。つまり、この『楚辞』天問の女媧の記載もまた、女媧が人類、ひいては万物の創造者であることを示している証拠の一つとしてあげることができるであろう。次に女媧と伏羲が人類の始祖であるという記載を見ていきたいと思う。

昔、宇宙が出来たとき、ただ、女媧兄妹だけが崑崙山におり、天下にはまだ人民は存在していなかった。相談をして、夫婦となったが、自ら恥じて、兄は、妹と崑崙山に登り、祈って言った。「天がもし、私たち兄妹を夫婦とならせるのなら、煙を合わせてください。もし、そうでなければ、煙を散らせてください。」と。そうすると、煙は、合わさった<sup>38)</sup>。(李尤撰『独異志』・唐/)

この『独異志』のように兄妹が夫婦となり、人類の始祖となったという内容の伝承は、少数民族である苗族の伝承にも存在している。ここで注目すべきは、「女媧兄妹」という記載である。「伏羲兄妹」とは書かれていないのである。恐らくは、本来、女媧に関する伝承であったことが表現上に残っているのであろう。女媧と伏羲は、元来、別々に奉られていたものが

合わさったのであろう。聞一多氏は、『伏羲考』の中で、伏羲は、苗族の始祖であることを述べ、また、女媧と伏羲は、もともとは同じであったことを論証されている。しかし、苗族の伝承においては、洪水伝説と合わさった内容となっており、伏羲や女媧ではなく、「ダロン」と「バロン」である<sup>39)</sup>。しかし、洪水伝説に登場する人類の始祖となる男女が女媧と伏羲であると信じられていることもまた事実である。

洪水伝説に登場する兄妹が女媧と伏羲であるということについては、聞一多が『伏羲考』の中で詳しく述べられているところである<sup>40)</sup>。つまり、伏羲は、「包戲」が古い形であり、瓢箪のことである。また、女媧の「媧」も同様に瓢箪の意味である。つまり、女媧は、「女伏羲」のことである。別の洪水伝説において、女媧と伏羲が瓢箪から出てくるというものもある。女媧と伏羲はともに瓢箪のことであり、女媧と伏羲は、元来は同じであるということである。洪水伝説に出てくる人物に女媧と伏羲の名前が当てられたということは、女媧や伏羲に—おそらく、女媧であると思われるが—人類の創造者としての要素があったからであろう。ただし、『独異志』では、粘土を捏ねて人を作るのではなく、男性神と女性神が結婚して、人類を生み出したという話となっており、人類の創造者がそのまま人類の始祖になっている。またここでは下半身が蛇であるといった人の形状と異なる要素は消し去られている。

### 3. 蛇の姿

上記の「補天者としての女媧」、「人類の創造者としての女媧」と、蛇の姿をとる女媧と直接結びつかない。蛇の姿であることに意味はないのだろうか。

神十人有り。名づけて女媧の腸と曰う。化して神為り、栗廣の野に處り、道に横ぎりて處る<sup>41)</sup>。(『山海経』大荒西経<sup>42)</sup>)

「腸」・「道に横たわる」という記述は蛇を連想させる。この記載について、郭璞は、「女媧は、古の神女にして帝なる者なり。人面蛇身にして、一日中七十變し、其の腹、化して此神を為る。」<sup>43)</sup>と、やはり蛇だと解している。ここでは、女媧は、神々を生んだ日本の神話の中でいう天照大神のような存在として位置付けられている。また、女媧が「七十化」という認識は、『楚辞』天問王逸註<sup>44)</sup>、『淮南子』説林訓、高誘注に見られる。これらの文献において、女媧は、天帝に近い存在として認識されており、女媧自身が何かを変化させる主体として描かれている。「化」とは、生まれ変わり、再生を連想させる言葉であるが、蛇は脱皮や冬眠などから、「再生」を象徴する生物である<sup>45)</sup>。古代中国人は死者は再生するものと信じ、そのために、遺体は防腐処理がなされ、生きたままの姿を保ち続けるための工夫がなされた。再生を掌る蛇の身体を持つ神が天帝として墓の中で君臨していたことは、「再生」に対する信仰によるものであろう。女媧が人面蛇身の姿で描かれているのは、そのような信仰がベースになっていると考えられる。伏羲自身の形状を蛇と結びつけるものは画像石には数多くあるが、文献では王延寿「魯靈光殿賦」(『文選』)の「伏羲鱗身、女媧蛇軀」にみえる。ただし、古い文献には、そのような記述はないため、女媧の形状が伏羲に影響を与えた可能性が強い。

女媧、古の神聖女にして万物を化するものなり(『説文解字』卷12・後漢)<sup>46)</sup>

『説文解字』には、女媧が人面蛇身であることは書かれていない。またこの「化」について袁珂は、『山海經校注』の中で、「化育」と解している。化育という言葉からは、儒教的な徳目によって教化する帝王の姿しかイメージされない。

雨，霽れざれば，女媧を祭る<sup>47)</sup>（『論衡』順鼓篇）

これは，当時，女媧が雨と関係した神として祀られていたことを示している。祭祀は保守的傾向が強く，古い形態をとどめていることが多いが，これも，本来，女媧のみが祀られていたことを示しているのであろう。しかし，王充は当時，伏羲と女媧がペアとしてあらわされることが多いことから，

伏羲，女媧は，俱に聖者なり。伏羲を捨てて，女媧を祭るは，春秋言わず<sup>48, 49)</sup>。

とコメントを付している。『風俗通義』にも，女媧は「伏羲の妹」<sup>50)</sup>と記されている。また，「女媧を祭るは，春秋言わず」とは，儒教の經典である『春秋』に女媧の名が見えないことを指摘したもので，おそらく『易』に伏羲が登場することと比較しての疑問を呈したものであろう。

女媒としての女媧が描かれている文献もある。

女媧，祠神を禱り，祈りて女媒と為す，因りて昏姻に置く……（路史後紀二『風俗通義』引）<sup>51)</sup>

女媧を媒とすることの理由については記されていないが，子孫を生き育てるといったこととの関連があるのだろう。また女媧と女媒は表現がよく似ている。ここでも女媧は，単独で表されている。つまり，女媧の伝承において，伏羲と女媧がペアで表されているものは，苗族に伝わっているような洪水伝承のみということになる。以下，文献以外において，女媧は，どのように描かれているのか検討していく。

#### 4. 遺物資料における女媧

女媧であるとされる遺物資料の中で最も古いと思われる資料は、湖南省の馬王堆帛書に描かれているものであろう<sup>52)</sup>。(図1)これは、前漢のものである。女媧は、天帝の位置に描かれるが、それは、文献で描かれている女媧像と一致する。ここでの女媧は単独で描かれており、これもまた文献の内容と一致する。

画像石に描かれているものは、その多くが後漢のものであり、ほとんどが女媧と伏羲がペアとして描かれている。別表に地域別に画像石を分類し、(表2)それぞれの特徴を示した。これらの画像を分析した結果、四川省の画像石に特に特徴的であるが、馬王堆帛書において描かれた女媧が天帝として君臨するという構図が画像石においても継承されているということが分かった。

表2 地域別女媧像

地域	時代	特 徴	備 考
安徽省	後漢	獸面蛇軀 頭に勝がある	図2 (4巻 P.156 205) 朱雀, 鋪首銜環 (左門門扉) 鋪首銜環 (右門門扉)
	後漢	人身蛇尾 鱗と爪がある 髪の毛を結っている	図3 (4巻 P.114 154) 伏羲 (前室頂蓋) 〈他の画像〉 拝謁画像 (前室東壁) 鼓舞, 長袖舞 (前室西壁) 車騎, 玄武, 龍虎 (前室南壁) 鋪首拏馬画像 (前室東壁, 兩甬道門の間) 交談画像 (後室後壁) 蓮花, 魚 (後室後壁)
除州市	後漢	人身蛇尾 尾を交差させている	図4 (4巻 P.75 104) 伏羲
山東省	後漢晚期	人身蛇尾 尾を交差させている	図5 (2巻 P.62 181) 伏羲 鋪首
	後漢晚期	右側に配置	図6 (2巻 P.53 153) 間に神物有り 伏羲有り (左側に配置) 女媧と伏羲の尾は, 神物の足に絡めている 〈他の画像〉 龍, 車騎 物拝見図 騎出行図



		虎撲怪獸 伏羲, 女媧 (尾を交差させている), 群獸 環, 鳳鳥 建鼓, 百戲 虎, 朱雀, 龍 象, 虎, 鹿, 鳥 樓閣, 機織, 兵器庫 狩獵, 紡績, 車騎出行
後漢早期		図7 (2巻 P.115 123) 伏羲有り
後漢中期	日輪	図8 (2巻 P.29 84) 伏羲有り 東王公 (女媧・伏羲の間/拱手)
後漢晚期	尾を交差させている	(2巻 P.1 3)
後漢		(3巻 P.52 151) 伏羲有り
後漢	定規 背中に羽	図9 (3巻 P.50 145) 脚有り
後漢	人首蛇尾獸足 月輪	図10 (3巻 P.30 90)
後漢	蛇尾 尾を交差させている	図11 (3巻 P.20 60) 伏羲有り
後漢	定規 月輪	図12 (3巻 P.8 23)
後漢	人身蛇尾 (脚有り) 定規 月を掲げる 尾を交差させている	図13 (7巻 P.57 180) 伏羲有り (コンパス, 太陽を掲げる) 石棺 子孫繁栄を表す 〈他の画像〉 車臨天門, 西王母 (石棺左側/天界の入口?) 神靈異獸 (蟾蜍・玉兔・九尾狐・三足鳥・雀・3匹の魚/石棺右側/宇宙?) 伏羲, 女媧 (石棺の奥=被葬者の頭側? =天帝の位置?)
後漢	髪のを結っている 太陽, または, 月を掲げる	図14 (7巻 P.52 165) 伏羲有り 石棺 〈他の画像〉 巴人舞, 雑技 (石棺右側) 伏羲, 女媧 (石棺の奥)
後漢	人首蛇身 太陽, または, 月を掲げる 靈芝を持つ 長い羽	(7巻 P.47 168) 伏羲 (太陽, または, 月を掲げる) 石棺右側
後漢	人首蛇身 二本足 髪のを結っている 羽飾り 飄帯 月輪	(7巻 P.47 148) 伏羲 (日輪) 石棺右側
後漢	人首蛇身 尾を交差させている 月輪	図15 (7巻 P.40 127) 伏羲 (日輪) 石棺奥側
後漢	人首蛇身 月輪 靈芝を持つ 尾を交差させている	図16 (7巻 P.35 107) 伏羲 (日輪) 石棺奥側
後漢	人首鳥身 背中の羽	図17 (7巻 P.33 100) 伏羲 (人首鳥身・冠・『伏希』)

四川省

	両手を掲げる 『女娃』の標題	石棺奥側
--	-------------------	------

注1：図と解説は、『中国画像石全集』（中国画像石編輯委員会編 山東美術出版社 河南美術出版社 2000年）  
2巻, 3巻, 4巻を参照。

注2：ページ数は、解説されているページ数を記載した。

注3：番号は、『中国画像石全集』における画像石の番号である。

## おわりに

上記の文献や画像石資料からみると、女媧は楚文化圏において単独の天帝であったように思われる。しかし、なぜ女媧と伏羲はペアとされるようになったのか。後漢時代から女媧と伏羲がペアとして描かれることが多くなっており、陰陽の思想と影響が大きいと思われる。しかし、なぜ女媧の相手として伏羲が選択されたのだろうか。聞一多は、「伏羲」の別称である「包戲」を取り上げて、「瓢箪」との関係性を述べている。また女媧の「媧」も「瓢箪」を表すことから、「女伏羲」であるとしている。つまり、女媧と伏羲は、本来、同一であるという説を立てている。しかし、文献や遺物資料における女媧についての記載や画像の分析から、次のように推測できる。女媧は、楚文化圏における天帝の地位にあった。このことは、『楚辞』天問における女媧の記載や馬王堆帛書において女媧が描かれている位置から想像することができる。聞一多は馬王堆の出土資料を見ることなく、この世を去っている。彼がこの資料を見ていれば、おそらく異なった結論となったのではないだろうか。伏羲は『易』繫辞伝や『莊子』に記載があるが、これらには女媧の記載は見当たらない。伏羲は禹の夏后氏と関係があったと聞一多は述べているが、そうすると伏羲は中原文化圏に属し、天帝の地位にあったのだろうか。このことから女媧と伏羲は元来、別系統にあったが、それらの氏族が接触した際、陰陽の思想と合わさり、どちらかの神が消滅してしまうのではなく、ペアとして存続することになったのではないだろうか。

また女媧が蛇の姿をとるということについて、これまでほとんど注意が

はらわれていなかったが、蛇のもつ再生とかかわる特性と、死者の埋葬儀礼に組み込まれている再生観念とを照合させることによって、女媧のもつ本来の役割を推定することが出来るのではないかと思われる。またこの蛇の形状が、伏羲に影響をあたえ、後漢になって伏羲自身も蛇の姿をとるようになったのではないかと思われる。

拙論はおもに後漢時代までの女媧について考察した。その後、女媧は道教において神としての確固たる地位を確立することはできなくなる<sup>53)</sup>が、そのことは西王母の出現とも大いに関わっているように思われる。そのことについては今後の課題としたい。

#### 注

1) 女媧については、

趙華「吐魯番出土伏羲女媧画像的芸術風格源流」『西域研究』第4期 1992年 100～107頁，郭德維「會乙墓赤漆墓室○上明和伏羲女媧図象試釈」『江漢考古』1号 1981年 56～60，78頁，侯哲安「伏羲女媧與南方諸民族」『求索』4号 1983年 102～107頁，孫重恩「伏羲女媧考」『中原文物』1983年 114～117頁，劉城淮「伏羲女媧神話論」『貴州文史叢刊』2号 1986年 99～105頁，曹必文「伏羲女媧兄妹婚辨正」『江海學刊』2号 1989年 113～115頁，金棹「伏羲女媧神話的文化意象—關於宗教與科學的起源和二・關係的演變—」『中國社會科學院研究生學報』6号 1990年 43～54頁，李炳海「伏羲女媧神話的地域特徵及文化內涵」『河南大學學報』32卷2号 1992年 26～30頁，易謀遠「中華民族・先是彝族・靈葫蘆裏的伏羲女媧嗎？—和劉堯環先生商討—」『民族研究』3号 1994年 33～41頁，楊利慧「女媧的神話與信仰」『中國社會科學博士論文文庫』中國社會科學出版社 1997年がある。

2) 許仲琳編『封神演義（上）』1～7頁 1973年 人民文學出版社

3) 前掲 5頁

4) 『列子』の成立年代においては議論の多いところであるが、楊伯峻は、『列子集釈』の中で、湯問篇について「魏晉當時には存在していたが、後に失われた」としている。

5) 『史記』三皇本紀は、司馬貞が撰した『史記索隱』の中で付け加えられた

ものである。

- 6) 高誘注、方架（さしがね；方形を書く定木）四寸也。寢繩直身而臥也（方は、架四寸なり。寢繩は、直身して臥すなり）とある。
- 7) 往古之時、四極廢、九州裂、天不兼覆、地不周載、火熾炎而不滅、水浩洋而不息、猛獸食顛民、鷲鳥攫老弱。於是女媧鍊五色石、以補蒼天、斷鼈足、以立四極、殺黑龍、以濟冀州、積蘆灰、以止淫水。蒼天補、四極正、淫水涸、冀州平、狡蟲死、顛民生。背方州、抱圓天、和春陽夏、殺秋約冬、枕方寢繩、陰陽之所壅沈不通者、竅理之、逆氣戾物、傷民厚積者絕止之。
- 8) 當此之時、臥倨倨、興眊眊、一自以為馬、一自以為牛、其行蹢躅、其視暝暝、侗然皆得其和、莫知所由生、浮游不知所求、魍魎不知所往。當此之時、禽獸蝮蛇、無不匿其爪牙、藏其螫毒、無有攫噬之心。
- 9) 考其功烈、上際九天、下契黃墟、名聲被後世、光暉重萬物。乘雷車、服駕應龍、騶青虬、援絕瑞、席蘿囟、絡黃雲前白螭、後奔蛇、浮游消搖、導鬼神、登九天、朝帝於靈門、宓穆休于太祖之下。
- 10) 註8～10の記載が女媧に関係すると思われる記述である。これらの記載は、註8の部分は、古代からの伝承の部分であると思われる。註9の記載は、その伝承を受けて、結果を述べた部分であり、また、註10の記載は、「考其功烈」と書かれているように、『淮南子』が編集された時点において女媧の補天についての評価をした部分であると考えられる。
- 11) 曾布川寛氏は、『崑崙山への昇仙—古代中国人が描いた死後の世界—』（中公新書1981年）の中で、馬王堆帛書に描かれている龍の図は、龍舟あるいは、龍車を表すとしている。この龍は、死者を天へと運ぶ役割を担っていたと考えられる。
- 12) 『淮南子』説林訓；黄帝生陰陽、上駢生耳目、桑林生臂手、此女媧所以七十化也。  
上記の記載を文の構造に基づいて訳すると「黄帝は、陰陽を生じ、上駢は、耳目を生じ、桑林は、臂手を生じさせた。これは、女媧が七十化したためである。」となる。「七十化」した主体は、女媧である。ただ、『莊子』には「六十化」とある。また、上記の記載だけでは女媧が人間を作ったという意味で捉えることは難しいが、高誘の註では、女媧が「造化」したと解釈されているので、高誘に註に従い、上記の記述を「人を創造した」と解釈した。
- 13) 上駢桑林皆神名也
- 14) 女媧、王天下者也。七十變造化、此言造化治世非一人之功也。
- 15) 然猶未及處戲氏之道也。

- 16) 伏戲、女媧不設法度而以至德遺於後世
- 17) 「昔者、黃帝治天下、而力牧、太山稽輔之、以治日月之行律、治陰陽之氣、節四時之度、正律曆之數、別男女、異雌雄、明上下、等貴賤、使強不掩弱、眾不暴寡、人民保命而不夭、歲時孰而不凶、百官正而無私、上下調而無尤、法令明而不闇、輔佐公而不阿、田者不侵畔、漁者不爭隈、道不拾遺、市不豫賈、城郭不關、邑無盜賊、鄙旅之人相讓以財、狗彘吐菽粟於路而無忿爭之心、於是日月精明、星辰不失其行、風雨時節、五穀登孰、虎狼不妄噬、鷲鳥不妄搏、鳳皇翔於庭、麒麟游於郊、青龍進駕、飛黃伏皂、諸北、僂耳之國莫不獻其貢職。然猶未及處戲氏之道也。」とあり、黃帝と伏羲の關係を伺うことができる箇所である。ここでは、黃帝の治世を伏羲の道（恐らくは、治世）と比較する記述を挿入することにより、伏羲の世が黃帝の世よりも古い時代であることを印象付けている。また、伏羲と女媧は、ペアとされていない。
- 18) 女媧陰帝而佐處戲治者也
- 19) 儒書言、「共工與顓頊爭為天子、不勝、怒而觸不周之山、使天柱折、地維絕。女媧銷煉五色石以補蒼天、斷鼈足以立四極。天不足西北、故日月移焉。地不足東南、故百川注焉。」
- 20) 然則天地亦物也。物有不足、故昔者女媧氏鍊五色石以補其闕。斷鼈之足以立四極。其後、共工氏與顓頊爭為帝、怒而觸不周之山、折天柱、絕地維。故天傾西北、日月辰星就焉。地不滿東南、故百川水潦歸焉。
- 21) 乃與祝融戰不勝而怒。乃頭觸不周山崩。天柱折、地維缺。女媧乃鍊五色石、以補天。斷鼈足以立四極、聚蘆灰止滔水、以濟冀州。於是地平天成。不改舊物。女媧氏沒、神農氏作。
- 22) 女媧氏亦風姓。蛇身人首。有神聖之德、代宓犧立。號曰女希氏。無革造。惟作笙簧。故易不載。不承五運。一曰、女媧亦木德王。蓋宓犧之後、已經數世。金木輪環、周而復始。特舉女媧、以其功高而充三皇
- 23) 聞一多『伏羲考』（『聞一多全集』1，三聯書店 1982年，3～68頁）
- 24) 前掲『伏羲考』35頁
- 25) 前掲『伏羲考』35頁
- 26) 前掲『伏羲考』35～36頁
- 27) 『易經』繫辭伝下；古者、包犧之天下也。仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文与地之、宣近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類万物之情、作結繩而為罔罟以佃以漁
- 28) 『莊子』内篇における伏羲の記述は次のようなものがある。「伏戲氏得之、以襲氣母（大宗師篇）」「昔者容成氏、大庭氏、伯皇氏、中央氏、栗陸氏、驪

畜氏、軒轅氏、赫胥氏、尊盧氏、祝融氏、伏羲氏、神農氏、當是時也、民結繩而用之、甘其食、美其服、樂其俗、安其居、鄰國相望、雞狗之音相聞、民至老死而不相往來（大宗師篇）」

- 29) 前掲『伏羲考』52頁
- 30) 赤塚忠訳『書経・易经（抄）』中国古典文学大系 平凡社 1972年 564頁
- 31) 天地開闢、未有人民、女媧搏黄土作人、務劇力不暇供、乃引繩於泥中、舉以為人。故富貴者黄土人也、貧賤者泥人也。
- 32) 蕭兵著『楚辞与神話』江蘇古籍出版社 1987年 360頁
- 33) 登立而為帝、孰道尚之
- 34) 女媧有體、孰制匠之
- 35) 曾布川寛『崑崙山への昇仙—古代中国人が描いた死後の世界—』（中公新書1981年）103頁
- 36) 傳言、女媧人頭蛇身、一日七十化、其體如此、誰所制匠而圖之乎？
- 37) 孫重恩「伏羲女媧考」『中原文物』1983年 114頁
- 38) 昔宇宙初開之時、只女媧兄妹在崑崙山、而天下未有人民、議以為夫妻、又自羞恥、兄即与妹上崑崙山、咒曰、天若遣我兄妹為夫妻而煙悉合、若不、使煙散、於烟即合
- 39) 村松一弥編訳『苗族民話集』平凡社 1974年 14~15頁
- 40) 聞一多『伏羲考』（『聞一多全集』1, 三聯書店 1982年, 59~61頁）
- 41) 有神十人、名曰女媧之腸、化為神、處栗廣之野、橫道而處。
- 42) 『山海経』の成立年代については、議論のあるところであるが、前野直彬『山海経』集英社 1975年 9~19頁の解説を参照とした。
- 43) 女媧、古神女而帝者、人面蛇身、一日中七十變、其腹化為此神。栗廣、野名。媧、音瓜。
- 44) 傳言女媧人頭蛇身、一日七十化、其體如此、誰所制匠而圖之乎？
- 45) 蛇については、小島瓔禮『蛇の宇宙誌蛇をめぐる民俗自然誌』、東京美術、1991年を参照。
- 46) 女媧、古之神聖女、化万物者也
- 47) 雨不霽、祭女媧
- 48) 伏羲、女媧、俱聖者也、舍伏羲而祭女媧、春秋不言。
- 49) 盼遂案；路史後紀卷二女皇氏篇，注云；「董仲舒法、攻社不霽、則祀女媧。」とある。
- 50) 『風俗通義』；女媧、伏羲之妹。（『路史』後紀二）
- 51) 女媧禱祠神祈而為女媒、因置昏姻、行媒始行明矣。夫昏以昏時、而昏繇此；

因以因婭、而因乎人。姻者、姻之始、媒者、姻之聚、所謂昏因姻媒如此。

(路史後紀二)

- 52) 馬王堆帛書に描かれている天帝の地位にあるとされる像は、女媧である説、伏羲である説、燭龍である説などがある。曾布川寛氏は『崑崙山への昇仙』の中で、この図が頭髪が長く垂れていること、容貌、衣装から女性と判断されることや、人身蛇尾であることなどから女媧と判断している。また女媧は一般には人面蛇身として知られ、『文選』王延寿「魯靈光殿賦」の中で、「伏羲鱗身，女媧蛇軀」と記述されている。
- 53) マカオに女媧廟がある。鄭正浩「澳門天主堂跡前の三叉路の路地…脇に珍しい女媧廟がある」。坂出祥伸「道教的密教的辟邪呪物の調査・研究」(科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書，2003年)17頁。

## 図1 馬王堆帛書

女媧が描かれている帛書は、1号墓と3号墓にある。1号墓の被葬者は、女性であり、3号墓の被葬者は、男性（親子関係にある）である。双方とも天界への昇仙を表しているということに関しては、共通している。しかし、異なる点もいくつかある。女媧が描かれている天上界に注目した。

### <1号帛書>

女媧（天帝の地位にある）

上半身：人間，青い衣

下半身：赤い蛇

頭髮：長い（女性であることを特徴付けている）

### <3号帛書>

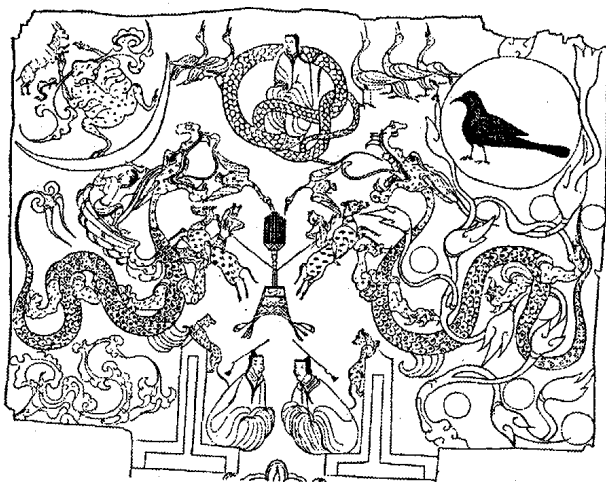
人身蛇尾の女神（女媧？）

位置：上段中央，台の上に立つ

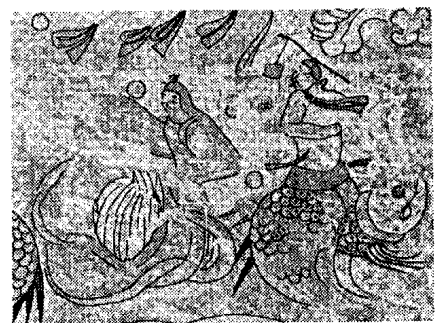
頭上：蓋（飾り紐が風に舞っている）

1号帛書との違い：女神の両脇に上半身が裸の男性（天帝の家臣を表す冠を着用，下半身は，蛇形である。女神と尾を交差させている）

上記の帛書の図柄解説は、曾布川寛『崑崙山への昇仙』中公新書 1981年101～104頁を参照にした。3号帛書については、曾布川氏も注目すべきものであると指摘されている。



長沙馬王堆1号墓出土帛画部分（模本）上段



長沙馬王堆3号墓出土帛画部分（模本）



图版资料



图 2

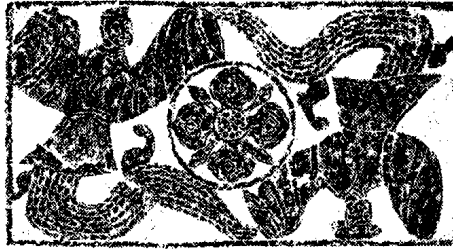


图 3



图 4

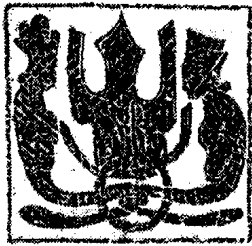


图 5



图 6

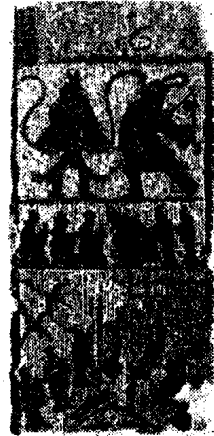


图 7



图 8



图 9



图 10



图 11



图12

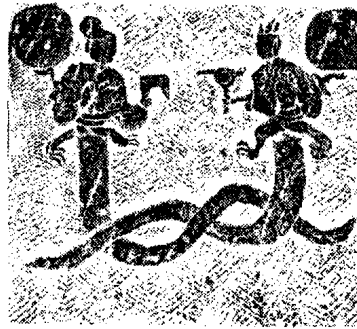


图13



图14



图15

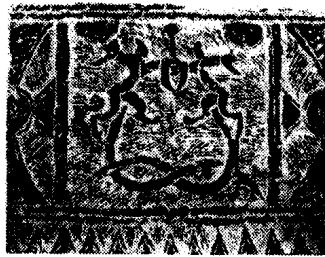


图16



图17

图13 配置图

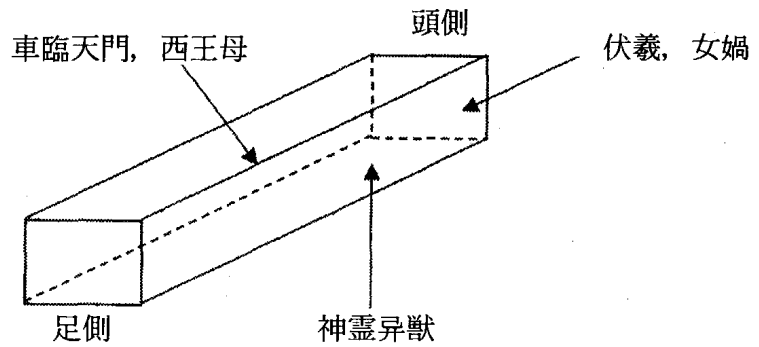


图14 配置图

